日本人青年の悲嘆に影響を与える要因の検討
――死別体験を青年はどのように経験しているのか――

Factors affecting grief：
Studies on young adults' bereavement experiences in Japan

「論文要旨」

明治学院大学大学院心理学研究科心理学専攻博士後期課程

14PSD001　石田　航
指導教員　金沢吉展　教授

第 1 章　序論

Internal Classification of Diseases, 11th revision（2018）おいて，初めて Prolonged Grief Disorder が掲載され，悲嘆研究の拡充が求められている。通常の悲嘆と Prolonged Grief Disorder など重篤な悲嘆の性質は同じものと考えられている（Shear, 2010）。

これまでの悲嘆の研究方法について，立野ら（2011）は研究デザインをレビューしている。その結果，実態調査や事例研究が多く積み重ねられている一方で，量的研究や質的研究が少ないことが示された。さらに量的研究と質的研究を織り交ぜた混合研究は国外においても少なく（Cupit et al., 2016），本邦においては見られない。以降では，国内外における悲嘆に関する横断的研究や縦断的研究についてまとめる。

悲嘆に影響する要因は，さまざまあげられている（Stroebe et al., 2007）。その中で本研究では，瀬藤ら（2005）の「死の状況」の要因，「死者との関係性」の要因，「死別者の特性」の要因，「社会的要因」の 4 つの分類を用いた。この分類の採用は，本邦の瀬藤ら（2005）以前の研究に小島（1988）が死別後の反応に影響を与える要因について提案しており，瀬藤ら（2005）の分類と似た構造をしている。本邦においては瀬藤ら（2005）以前よりこれらの要因が重要であると認識されていることが考えられ採用した。以下では 4 要因についてレビューを行っていく。

「死の状況」の要因について，Carr et al.（2001）や Merlevede et al.（2004）は，突然の死と死が予期できる場合に，突然の死の方が悲嘆が強くなることを示した。一方で，Stroebe & Schut（2001）や Stroebe（2007）では死が予期できる場合と突然の死では精神的健康に差がないことを示しており，一貫していない。「死者との関係性」の要因について Parkes & Weiss（1983）は，配偶者を亡くした場合，故人との関係性が愛憎入り交じった両価的な関係や，強い依存的な関係にある場合など葛藤関係にある場合に，死別後の適応を阻害することを述べている。一方で Servaty-Seib（2006）は平均年齢 15.8 歳（*SD*=1.1）の青年を対象に故人との親密度が高いほど，悲嘆の得点が高くなることを示した。「死別者の特性」の要因については，Stroebe & Stroebe（1993）が死別を経験した人を対象に Locus of Control（以下 LOC と略記）から検討し，内的統制の低い人ほど，うつ症状や身体症状が深刻であることを示した。死別の場合，死の事実を変容することは不可能であるため，自らを適応させていく必要がある。そのため，自らを置かれた環境にあわせようと，自分の力でコントロールできるという信念を持ちやすい内的統制をする人ほどその後の適応が良いとされる。「死別者の特性」の要因における，死別後のコーピングに関しては，Stroebe & Schut（1999）によって提示された二重過程モデルがあげられる。二重過程モデルでは死別に対するコーピングを 2 つに分類した。喪失体験そのものに焦点をあてる喪失志向コーピングと，喪失

した後の変化した生活に焦点をあてる回復志向コーピングである。二重過程モデルの尺度の標準化は本邦では行われていないが，海外では試みられている（Caserta & Lund, 2007：Wijngaards-de Meij, 2007；Aslanzadeh, 2017）。「社会的要因」においては，Lehman et al.（1986）や，岡林ら（1997）は，死別に対して，ソーシャルサポートを有している人のほうが，その後の心理的適応や精神的健康度が高く，死別を肯定的に意味づけていることを示している。

本邦における重篤な悲嘆に関する研究は，配偶者を亡くした人を対象に行われることが多かった。そのため，おのずと研究協力者の年齢も壮年期以上を対象とする場合が多かった。しかし，死別の影響は配偶者のみならず，家族にも生じると考える。Dillen & Fontaine（2009）は，祖父母を亡くした青年を対象に研究を行い，悲嘆と抑うつの間に相関があるとしている。また，Oosterhoff et al.（2018）は死別を経験した青年を対象に研究を行っており，死を経験することによって，学業成績や集中力などが低下することを示している。安藤ら（2004）は，大学生までに 76%の人が死別を経験するとした実態調査を行っている。死を初めて経験した場合，対処の方法などが分からないことから，精神的に混乱するとされている（Worden, 2008/2011）。大切な人との死別後，重篤な悲嘆に陥った人が自殺する可能性は，成人だけでなく，親を亡くした未成年者においても高まることが示されている。しかし青年における悲嘆の実態を明らかにした研究は事例研究では示されているが（菊池,2006；高橋,2013）量的・質的研究法で検討した研究は十分ではない。青年を対象に悲嘆に影響する要因について検討し，重篤な悲嘆に至るのを未然に防ぐ方法について示唆を得ることは臨床的に意義があると考えられる。

第 2 章　目的と意義

本研究の目的は，本邦の一般青年が経験する死（急性悲嘆を除外するため死別から 1 年未満の対象者を除外する, Prigerson, 1995；Shear, 2010）を対象とし，悲嘆が重篤化することを未然に防ぐ方法を検討するため，悲嘆に影響を与える要因とそのプロセスについて明らかにすることである。そのため本論文は 3 つの研究で構成した。以下をそれぞれの研究の目的とする。

第一に，「死別者の特性」の要因の中でもコーピングに関する尺度を作成する。死別後の悲嘆へのコーピングには Stroebe & Schut（1999）の二重過程モデルがあげられる。しかし本邦において二重過程モデルに則した尺度は作成されていない。そのため，二重過程モデルに則した死別後のコーピングに関する尺度を作成することを目的とする（研究 1）。

第二に，瀬藤ら（2005）は「死の状況」の要因，「死者との関係性」の要因，「死別者の特性」の要因，「社会的要因」の 4 要因が悲嘆に影響する要因として述べている。4 要因のそれぞれの領域については研究が進められているも

のの，4 要因がどの程度，悲嘆を説明するかについて検討した研究は見られない。そのため，4 要因が悲嘆をどの程度説明するかを横断的に明らかにすることを目的とする（研究 2）。

第三に，大切な人と死別し悲嘆を経験した人を対象に故人との生前の関係性から死別を経て現在までの心理的なプロセスを探索的に明らかにすることを目的とする（研究 3）。

本研究の意義は，以下の通りである。第一に，青年期における悲嘆の詳細を検討することができる。それにより，現状生じている悲嘆によって苦悩を経験している人への支援を考える上で示唆を得ることができる。

第二に，本研究により悲嘆に影響を与える要因とそのプロセスを検討することができる。それにより重篤な悲嘆を未然に防ぐ対応について知見を得られる可能性がある。

第 3 章　青年を対象とした悲嘆に影響を与える要因のひとつである死別後のコーピングに関する研究（研究 1）

3.1 死別後のコーピングに関する尺度作成の試み（研究 1（予備調査））

研究 1（予備調査）の目的は，インタビュー調査によって，Stroebe & Schut（1999）が提示した二重過程モデルに則した尺度項目を作成することである。

大切な人との死別を 9 歳以上で（Nagy, 1948）経験し，1 年以上が経過した（急性悲嘆の除外, Prigerson, 1995；Shear, 2010）人を募集の際の条件とした。その結果，15 名（男性 6 名・女性 9 名）を対象とした。分析はインタビューの逐語録から，喪失志向コーピングと回復志向コーピングの定義（Stroebe & Schut,1999）に則り，評定，分類を行った。分析は，筆者および心理学専攻の大学院生 4 名の 5 名で行った。

インタビューの結果，コーピングは 308 個抽出された。抽出されたコーピングを評定・分類したところ，先行研究とは異なり 4 つのカテゴリに分類された。それら 4 つのカテゴリを喪失志向コーピング，回復志向コーピング，未来志向コーピング，どれにも分類できない分類不能のコーピングと命名した。結果では，カテゴリ名を【　】で記載する。

喪失志向コーピングにおいては【積極的コーピング】と【消極的コーピング】が生成された。【積極的コーピング】における小カテゴリは 10 に分類された。【消極的コーピング】における小カテゴリは 7 に分類された。回復志向コーピングは 14 に分類された。得られた結果と先行研究を参考に筆者および心理学専攻の大学院生 4 名の 5 名で悲嘆への対処に関する新しい尺度項目の作成を行った（3 カテゴリ 33 項目）。

3.2 死別後のコーピングに関する尺度作成の試み（研究 1（本調査））

研究 1（本調査）の目的は，研究 1 によって作成された項目（3 カテゴリ 33

項目）の信頼性と妥当性の検討を行うことである。

大切な人との死別を 9 歳以上で（Nagy, 1948）経験し，1 年以上が経過した（急性悲嘆の除外, Prigerson, 1995；Shear, 2010）人を募集の際の条件とした。その結果 165 名が対象となった。質問紙の内容は，①デモグラフィック要因，②研究 1 によって作成された 33 項目，③弁別的妥当性尺度として，3 次元モデルに基づく対処方略尺度（以下：TAC-24 と略記）（神村ら,1995）を用いた。弁別的妥当性として, TAC-24 を採択した理由として, Stroebe & Schut（2001）らが，喪失志向コーピングと回復志向コーピングは，それぞれ情動焦点型コーピングと問題焦点型コーピングに関連する概念であると考察しているためである。④悲嘆を測定する尺度として，Inventory of Traumatic Grief（以下：ITG と略記）（（財）21 世紀ヒューマンケア研究機構こころの研究所, 2004）を用いた。

分析は，研究 1 によって作成された項目を主因子法・プロマックス回転による探索的因子分析を行った。その結果，2 因子 16 項目が抽出され，それぞれ故人への接近型コーピングと故人への回避型コーピングと命名した。その後因子分析によって抽出された因子の信頼性・妥当性に関する分析を行った。

故人への接近型コーピングは，弁別的妥当性として採用した TAC-24 の情動焦点型コーピングと問題焦点型コーピングと有意な相関がみられ，先行研究から想定される結果であった。また，クロンバックの α 係数の値や再検査法の結果により，信頼性が示唆された。本尺度項目の特徴として，尺度項目が研究 1（予備調査）の喪失志向コーピングに分類された項目が多い結果となったが，死別直後に生じやすい行動は見られなかった。故人との死別を通して，故人を思い出すことや物思いに耽ることで，喪失を受け入れることに役立つコーピングと考えられる。

次に故人への回避型コーピングは，クロンバックの α 係数の値より，信頼性が示唆された一方で，弁別的妥当性として採用した TAC-24 の情動焦点型コーピングと問題焦点型コーピングと相関がみられなかった。本尺度がどのような構成概念を測った尺度なのかを検討するために，今後は妥当性の検討が課題となる。

本尺度項目からその特徴を類推すると，そのほとんどが悲しみに留まるのではなく死別や悲嘆を回避する項目となった。Shear（2010）や中島（2016）は，悲嘆に対して, 非適応的な回避行動が悲嘆を重篤化させることを示唆している。本研究では一般青年を対象として研究を進めた中で，死別を回避する概念が抽出された。他の年代との比較や海外との比較を行い，死別に対する回避が見られるかについて検討し，これが青年期に特徴的な概念であるかを今後検討する必要がある。なお，研究 1 において故人への回避型コーピングの妥当性の確認ができなかったことや，研究 1 の時点で故人への回避型コーピングの構成概念を推定することができないこと，研究 2 の目的は悲嘆に影響を与える要因の検討であり，故人への回避型コーピングの構成概念を検証することが目的ではないことから研究 2 以降において，故人への接近型コーピングのみを用いること

とする。

第 4 章　青年の悲嘆を説明する要因の検討

（研究 2）

研究 2 の目的は悲嘆に影響する 4 要因が悲嘆にどの程度影響するかを明らかにすることである。そのため 4 要因に準ずる尺度を説明変数とし，ITG を目的変数とした，重回帰分析を行った。

大切な人との死別を 9 歳以上で（Nagy, 1948）経験し，1 年以上が経過した（急性悲嘆の除外, Prigerson, 1995 ; Shear, 2010）人を募集の際の条件とした。その結果 135 名が対象となった。最初に ITG と 4 要因の概念を測定する尺度の相関分析を実施した。ITG と「死の状況」の要因（死因（突然の死を「1」，闘病のある病死を「2」とし，ダミー変数として用いた)），「死者との関係性」の要因（対人ストレッサー尺度（橋本, 2005)），「死別者の特性」の要因（故人への接近型コーピング尺度（石田, 2016）・LOC（鎌倉ら, 1982)），「社会的要因」（死別後サポート尺度（坂口, 2004)）の間に相関関係が見られた。しかし，「死別者の特性」の要因の LOC における External 尺度に相関関係が見られなかった。4 要因を説明変数，ITG を目的変数とした重回帰分析を実施したところ有意な分散が認められた（F＜6,128＞=12.3, $Adj.R^2$=.34, p<.001)。

重回帰分析の結果，死因として突然死であること，故人との関係性に葛藤が強いこと，死別後に喪失者がソーシャルサポートを知覚できていないこと，故人への接近型コーピング尺度項目にある行動をより多くすること，LOC における内的統制が高いことが，悲嘆に影響することが示唆された。

第 5 章　死別を経験した青年の悲嘆の心理的プロセスの検討

（研究 3）

研究 3 の目的は大切な人と死別し，悲嘆を経験した人を対象に，故人との生前の関係性から死別を経て現在までの心理的なプロセスをインタビュー調査によって明らかにすることである。

研究 2 に協力した研究協力者のうち同意が得られた 14 名を対象とした。分析は，グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Glaser & Strauss, 1967 ; 岩壁, 2010）とした。分析は筆者と分析協力者 1 名（臨床心理士）によって行われた。生成されたカテゴリの関係性を逐語録と複数回照らし合わせながら，関連図を作成し，プロセスの検討を行った。

分析の結果，4 の大カテゴリが作成された。関連図の検討を行うと，【生前

の故人に関わる】【死別に動揺する】【悲しみに対応する】【現実に折り合いをつける】のプロセスを経ると考えられた。【悲しみに対応する】内ではソーシャルサポートを二地点で求める語りが見られた。石田（2016）は子どもを亡くした親を対象にインタビュー調査を行い，死別直後に求めるソーシャルサポートは継続しにくいことを示しており、本研究と同様の結果が見られた。

第 6 章　総合考察

本研究の目的は，本邦の一般青年が経験する死（急性悲嘆を除外するため死別から 1 年未満の対象者を除外する, Prigerson, 1995 ; Shear, 2010）を対象とし，悲嘆が重篤化することを未然に防ぐ方法を検討するため，悲嘆に影響を与える要因とそのプロセスについて明らかにすることであった。

6.1　青年の悲嘆のプロセスにおける故人への接近型コーピング尺度について

研究 1 では，故人への接近型コーピング尺度を作成した。研究 2 では，故人への接近型コーピング尺度得点（石田, 2018）が高まると，ITG 得点が高まることが示唆された。故人への接近型コーピング尺度の項目の特徴として，死別直後の感情の表出といった混乱した時期での悲嘆への対応は項目に含まれず，死別から少し経過した時点での悲しみへの対応に関する項目であると考察されていた。

これについて，研究 3 の関連図を用いて考察する。【悲しみに対応する】カテゴリの後半である＜時間を経ても悲しみが生じる＞ と, 同時に生じると考えられた＜故人との絆を継続しようとする＞などは，死別からの時間的経過とともに，悲しみを経験しながらも故人を新しく位置づけようとする試みであることが語りから考えられた。これらから，故人への接近型コーピング尺度と，＜時間を経ても悲しみが生じる＞と，同時に生じると考えられる＜故人との絆を継続しようとする＞などは，内容的に類似する結果のように考えられる。

6.2　「死の状況」の要因について

研究 2 では，一般青年を対象に質問紙調査を行い,「突然の死」と「闘病のある病死」では,「闘病のある病死」よりも「突然の死」のほうが ITG 得点が高まることが示された。研究 3 では, 一般青年を対象にインタビュー調査を行った。その結果,【生前の故人と関わる】,【死別に動揺する】,【悲しみへの対応】,【現実に折り合いをつける】というプロセスを経ることがわかった。死因によるプロセスの差を検討する場合には，死因ごとにプロセスを作成し，どのような違いが生じるかを検討する必要がある。

6.3　「死者との関係性」の要因について

研究 2 では,「死者との関係性」の要因として取り上げた対人ストレッサー

尺度得点（橋本, 2005）が高まると，ITG 得点も高まることが示唆された。一方で，研究 3 では，【生前の故人と関わる】の小カテゴリは，＜故人との関係性は良好である＞と＜故人とは葛藤関係である＞であり相反する概念となった。故人との関係性によるプロセスの違いを検討する場合には，関係性にによってプロセスを作成し，どのような違いが生じるかを検討する必要があり，今後の課題である。

6.4　「死別者の特性」の要因について

「死別者の特性」の要因の LOC について，研究 2 と研究 3 で類似する結果となった。研究 2 では，「死別者の特性」の要因として取り上げた，LOC（鎌原ら, 1982）における内的統制と ITG 得点との間には負の相関が示された。Stroebe & Stroebe（1988）らは死別の場合，死の事実を変容することは不可能であるため，自らを適応させていく必要がある。そのため，自らを置かれた環境にあわせようと，自分の力でコントロールできるという信念を持ちやすい，内的統制をする人ほどその後の適応が良いとしている。これらは，研究 3 の関連図の最後にある【現実に折り合いをつける】に内容的に類似するように考えられる。【現実に折り合いをつける】は置かれた現実に自身が適応しようとする概念に該当するため，内的統制に類似すると考える。

6.5　「社会的要因」について

「社会的要因」は研究 2 と研究 3 では部分的に類似する結果となった。研究 2 では,「社会的要因」として取り上げた, 死別後サポート尺度得点（坂口, 2004）が低くなると ITG 得点が高まることが示唆された。

研究 3 の結果から，研究協力者は死別後にサポートを求める時期が二時点あることが示唆された。研究 3 における関連図からは，後者の＜死別後しばらくしてサポートを求める＞を契機とし，亡くなったことをネガティブに捉えることから変化が生じ，現在に向かっていくように考えられる。一方で，前者ではサポートが適切に機能しないことが語りから見られる。これらから，研究 2 における結果は，研究 3 における関連図の後者に位置付けたサポートに関連するものと考えられる。

6.6 本研究の限界と課題

研究 1（本調査）における因子分析で故人への接近型コーピングと故人への回避型コーピングの 2 因子が抽出された。しかし妥当性が確認できないことや，故人への回避型コーピングの構成概念を推定することができないこと，研究 2 の目的は悲嘆に影響を与える要因の検討であり，故人への回避型コーピングの構成概念を検証することが目的ではないことから研究 2 以降において，故人への接近型コーピングのみを用いた。しかし故人への回避型コーピングの因子負荷量は妥当な値であり，信頼性（クロンバックの α）の確認もなされていた。今後は，故人への回避型コーピングがどのような概念であるかについて検討する

ことで，一般青年が死別後にどのような対処を行いやすいのかについて詳細に検討することができると想定される。

出来事の発生は防御要因を分母とし，リスク要因を分子とする方程式によって検討することができる（Albee, 1982）。ターゲットとするものの発生率を減らすには，防御要因である分母を増やし，リスク要因である分子を減らす必要があることを述べた。本研究をこの方程式に代入すると，防御要因はソーシャルサポートやコーピング，LOC における内的統制であり，リスク要因は，死因や故人との葛藤が当てはまると考えられる。ソーシャルサポートやコーピング，LOC における内的統制を強化し，死因や故人との葛藤に配慮することによって，重篤な悲嘆に陥ることを予防できる可能性も考えられるため，今後はこの方程式を用いた研究を行っていくことが求められる。（7975/8000）